

秋営地への移動の準備で、幼児用の鞍に子どもを縛って落ちないようにする



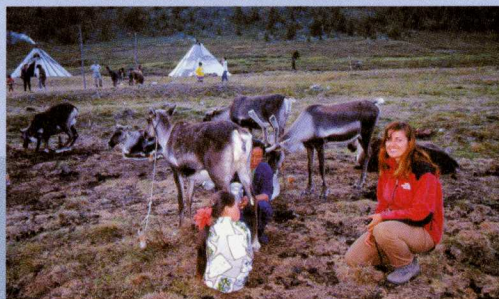
トナカイの乳房を拳で叩きながら搾乳する。乳量は約250グラムと少ないが、脂肪分が牛乳の5倍もある。チーズに加工したり、茶に入れて飲む



夏営地で、トナカイの群れを追う少女。トナカイは灌木(かんぼく)の若葉を食べる



夏、伸びてきたトナカイの袋角を切る。袋角は漢方薬になる。以前はネグデルに納めたが、今は仲買人が中国に売っている



今や、国際観光スポットとなったツァータン社会

トナカイ (学名: Rangifer tarandus)

スカンジナビア半島からシベリア、グリーンランド、北米のタイガ帯、ツンドラ帯、北極圏にかけて生息する。オス、メスともに角をもつ。角は春に生え始め、大きな枝分かれした袋角に生長する。袋角の表面には皮膚があり、そこから体温を放出する。大きな枝角は表面積を増やしており、夏に効率よく体温を放出する。秋から皮膚を落として骨角になり、冬に角が脱落する。また、寒さや雪に適応した厚い毛皮や横に広がる蹄(ひづめ)をもつ。夏は草や木の葉を食べ、冬は雪をかきわけてコケなどを食べる。



生きもの
博物誌

【トナカイ/モンゴル】

トナカイと生きる

稲村 哲也
(いなむら てつや)

愛知県立大学教授

トナカイ飼養発祥の地

モンゴル最北端フスグル県に「ツァータン」とよばれるトナカイ遊牧民がいる。遊牧生活続けるのは三〇家族ほどに過ぎない。しかし、そこはトナカイ遊牧の最南端、また山地タイガ帯の最南端、草原と接する地域であり、「トナカイ飼養が草原の牧畜に影響されて成立した」との説によれば、トナカイ飼養発祥の地である。またツァータンたちの生活は、タイガのトナカイ遊牧の形態をよく維持している。

筆者が最初にかの地を訪ねたのは一九九三年九月。モンゴル人地理学者とともに、ウランバートルからロシア製ジープを走らせ、北端のソム(郡)定住区まで四日かかった。国境警備隊の宿舎に泊めてもらい、翌朝、ウマを用意し国境警備隊の案内で出発した。森のなかを駆け、湿地を抜け、川を渡り、山道を上下し、休まず進んだが、途中で陽が落ちてしまった。進路をウマに委ねてなお進むと、イヌの吠え声が聞こえ、暗闇に天幕のシルエツトが浮かんだ。なかに招き入れられると、ツェウエルさんというおばあさんと娘さんがトナカイ乳入りのお茶を出してくれた。それが美味しくて何杯もお代わりした。トナカイの毛皮の上に疲れた身を横たえ、と、円錐形天幕の頂点の間から雪が降り込んでいた。翌朝、天幕の外に白銀の世界が広がっていた。雪原の起伏の向こうからトナカイたちがあらわれた。トナカイに騎乗した息子さんが巧みに群れを追ってくる。心のなかでおもわず「これだ」と叫んでいた。それから筆者は、ツェウエルさん一家を毎年のように訪問し、いつしか一〇回を数えた。

悠久のときを過ごしてきたかに見えたツァータンたちは、じつは、激動の時代をからくも生きぬいてきたのだ。もともと、西に接するトゥバ共和国(現在ロシア連邦に属す)とモンゴルの国境地域で移動していた彼らは、一九四四年、トゥバがソ連に併合された後、夜陰に紛れて国境を越えてきた。コルホーズのための家畜共有化、対ドイツ戦のための家畜徴用、子どもたちの学校の寄宿舎での病氣蔓延などがその理由だった。

ようやく定着したモンゴルでも一九五〇年代末、コルホーズに倣ったネグデル(農牧組合)が実施され、トナカイが共有化され、それを請け負って飼うようになった。給料が支給され、小麦粉などの食糧が安定的に供給され、狩猟への依存度が減り、トナカイ飼養数が増加して一〇〇〇頭を超えた。一方、林業や漁業が開発され、定住区に住む人も増えた。

適応の道を模索

一九九〇年、モンゴルは民主主義市場経済に国家体制を転換した。トナカイが私有化されたが、給料はなくなり、医療、獣医、流通、情報などすべての生活支援システムが無くなった。生活に窮したツァータンのトナカイ個体数は数年で半数に減ってしまった。一方、森の民の小さな社会が突然、秘境中の秘境としての国際観光スポットになってしまった。幸い、観光は夏の短い期間に限られる。ツァータンのある者は観光客へのみやげ物を考案し、収入をえるようになった。また、ウシやヒツジを飼う草原の遊牧民と協力し合い、草原家畜を所有して乳製品や現金収入をえるなど、新たな適応の道を模索している。

ツェウエルおばあさんは数年前に亡くなったが、娘のハンダーさんが結婚して子どもができた。国際関係と国家体制の変革に翻弄(ほんろう)されながら、伝統を守ってきたツァータンたちは、これからも森を愛し、トナカイとともに生きる生活を続けてくれるだろう。